

音源の比較試聴(45)

—マーラーの交響曲第3番—

1. 始めに

前報(44)に引き続き、各種音源の再生経路に関する仮想アースとアースアキュライザーや OPT ISO BOX や LAN iPurifier Pro などを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログ関係の対策の経過は前報(27)でも延べたとおりで、配信や CD 再生の光アイソレーションなどの対策は fidata HFAS1-S10 の活用シリーズや OPT ISO BOX の導入シリーズや LAN iPurifier Pro で報告してきました。

今回、同じ曲のアナログ盤と CD と STAGE+からの配信を比較試聴します。

アナログ盤は下記を使用します。

PHILIPS SAL 353-4

グスタフ・マーラー 交響曲第3番

ベルナルド・ハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

CD は下記を使用します。

RCA BVCC-38473-74

グスタフ・マーラー 交響曲第3番

デヴィッド・ジンマン指揮チャーリッヒトーンハレ

配信は STAGE+とベルリンフィルデジタルコンサートホールから上記と同一の曲を選択します。

グスタフ・マーラー 交響曲第3番

アンドリス・ネルソンス指揮ウィーンフィル

グスタフ・マーラー 交響曲第3番

クラウディオ・アバド指揮ルツェリン祝祭管弦楽団

グスタフ・マーラー 交響曲第3番

ロレンツォ・ヴィオッティ指揮ベルリンフィル

それぞれの音源は、下記の経路で聴いていきます。

アナログ盤

LINN LP-12→ZANDEN Model 12→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

CD

EMT981→TruPhase(B)→TruPhase(A)

STAGE+およびベルリンフィルデジタルコンサートホール

ルーター→スイッチングハブ→PC→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

3. 音源の比較試聴結果

アナログ盤は、レーベルに対応したイコライザー特性で聴いていきます。

アナログのハイティンク指揮アムステルダムコンサートヘボウ盤は、1966年の録音ですが、冒頭のホルンや金管の響きも柔らかく、低弦群も明晰で量感もあります。2楽章以降は弦や木管やコントラアルトの歌唱や少年合唱団の合唱なども優しく響き、定位もホールの響きもしっかりしています。

CDのジンマン指揮チャーリットーンハレの演奏は、2008年の録音でアナログライクな音で、ホルンや金管、弦や木管の質感も十分です。

STAGE+の配信のネルソンス指揮ウィーンフィルの演奏は、2021年のザルツブルグ音楽祭の収録で、ウィーンフィルらしい弦や木管の優雅な音色と深みと厚みのあるオーケストラが聴きどころです。

STAGE+の配信のアバド指揮ルツェルン祝祭管弦楽団の演奏は、アバドのおだやかなリードもあって、エッジのとれたソフトタッチの演奏で、解像度よりは音の協和。溶け合いが感じられます。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールの配信のヴィオッティ指揮ベルリンフィルの演奏は、ヴィオッティの切れの良い指揮の下、この大曲の弱音から総奏までベルリンフィル大ホールに大きなスケールで響きわたり、特に低音のホール内の周りこみがリアルです。

4. まとめ

アナログ再生と STAGE+からの配信を比較してみましたが、これまでの対策で、すべてにおいてレベルが向上しており、以前のような格差がなくなってきており、ダイナミックレンジの大きなスケール感のある曲の、収録年代や収録環境が的確に表現されており、オーケストラやホールの音の違いまで把握できました。

以上